

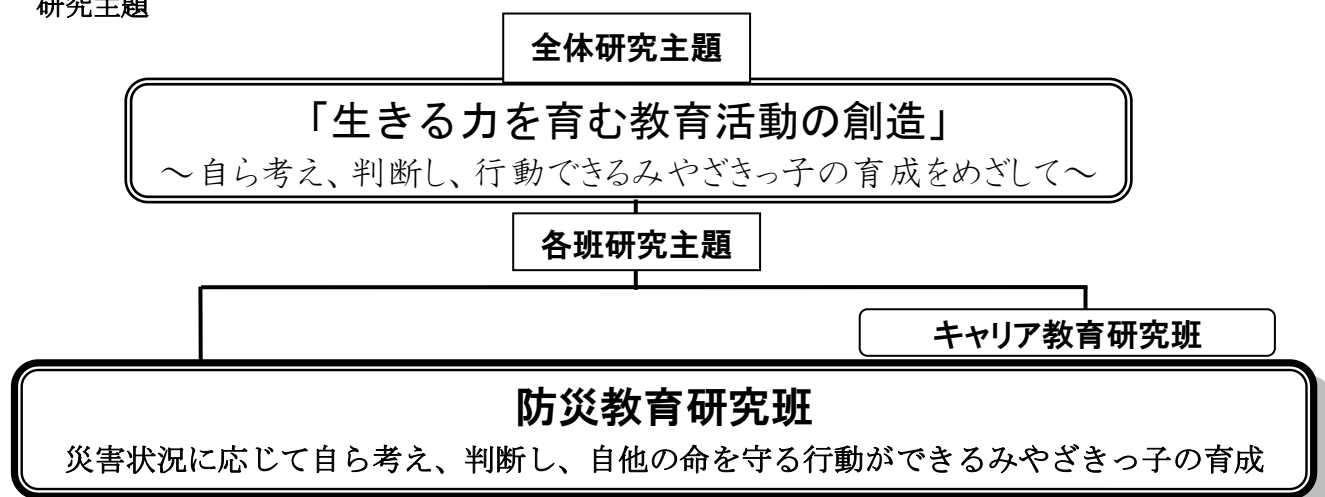
宮崎市教育情報研修センター

防災教育研究班

I	研究主題	・・・・・・・・	1-1-1
II	主題設定の理由	・・・・・・・・	1-1-1
III	研究目標	・・・・・・・・	1-1-1
IV	研究仮説	・・・・・・・・	1-1-2
V	研究構想	・・・・・・・・	1-1-2
VI	研究の実際	・・・・・・・・	1-1-2
	1 実態調査・結果分析	・・・・・・・・	1-1-2
	2 目指す児童生徒像	・・・・・・・・	1-1-3
	3 継続的な指導	・・・・・・・・	1-1-3
	(1) 指導の実際	・・・・・・・・	1-1-4
	(2) 実態調査の変容	・・・・・・・・	1-1-4
	(3) 成果と課題	・・・・・・・・	1-1-5
	4 防災知識を高い実践力につなげていく指導方法の工夫	・・・・	1-1-5
	(1) 小学校での取組 (第2学年)	・・・・・・・・	1-1-5
	(2) 中学校での取組 (第1学年)	・・・・・・・・	1-1-7
VII	成果と課題	・・・・・・・・	1-1-10
	1 研究の成果	・・・・・・・・	1-1-10
	2 研究の課題	・・・・・・・・	1-1-10

～引用・参考文献、研究同人～

I 研究主題



II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められていることから、基礎基本の確実な定着はもちろんのこと、キャリア教育・安全教育など今日的課題に対して教科等を横断して指導することが重要視されてきている。

本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着をもつ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定されており、その中に確かな学力やキャリア教育等の充実が基本目標として掲げられている。さらに、本市の重点目標である防災教育の充実においても、東日本大震災の教訓や日向灘域の地震発生の可能性を受け、平成24年度より市内の小中学校に新たに防災主任を位置付け、「宮崎市防災教育手引書」を作成したところである。

これらの状況を踏まえ、本研究班においては、平成24年度より、「災害状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守る行動ができるみやぎっ子の育成」についての究明を進めてきた。本来、災害とは、風水害、火災、地震、津波などの全ての災害を意味している。しかし、平成23年に東日本大震災が起きたことと南海トラフを震源とする地震とそれに伴う津波がいつ本市に襲来してもおかしくない状況にあることから、地震・津波に特化した防災教育について研究を行っている。昨年度は、日常指導における継続的な指導や「宮崎市防災教育手引書」を活用した防災学習を行うことで、防災に関する知識や技能を児童生徒に習得させることができた。また、PDCAサイクルを生かした避難訓練を行うことで、児童生徒が主体となって避難訓練に参加することができ、一定の成果を得ることができた。一方で、各学校の年間行事で決まっている避難訓練の実施回数や実施内容を大きく変えることは難しい現状があり、年間を通じた避難訓練と授業等を関連させた指導については、より工夫改善を図っていく必要があると考えた。そこで、本年度は、継続的な指導と「宮崎市防災教育手引書」を基にした授業、そして避難訓練を関連付けた防災教育を進めていく。そのために昨年度の研究実践を基盤とした継続的な指導・防災に係る授業・避難訓練を関連付けた防災教育に係る指導方法の工夫を行うことで「災害状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守る行動ができるみやぎっ子の育成」ができると考えた。

III 研究目標

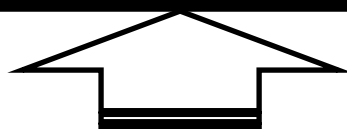
「災害状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守る行動ができるみやぎっ子の育成」のために、防災教育の在り方を究明する。

IV 研究仮説

継続的な指導・防災に係る授業・避難訓練を関連付けた防災教育に係る指導方法の工夫を行えば、災害状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守ることができる児童生徒を育成することができるであろう。

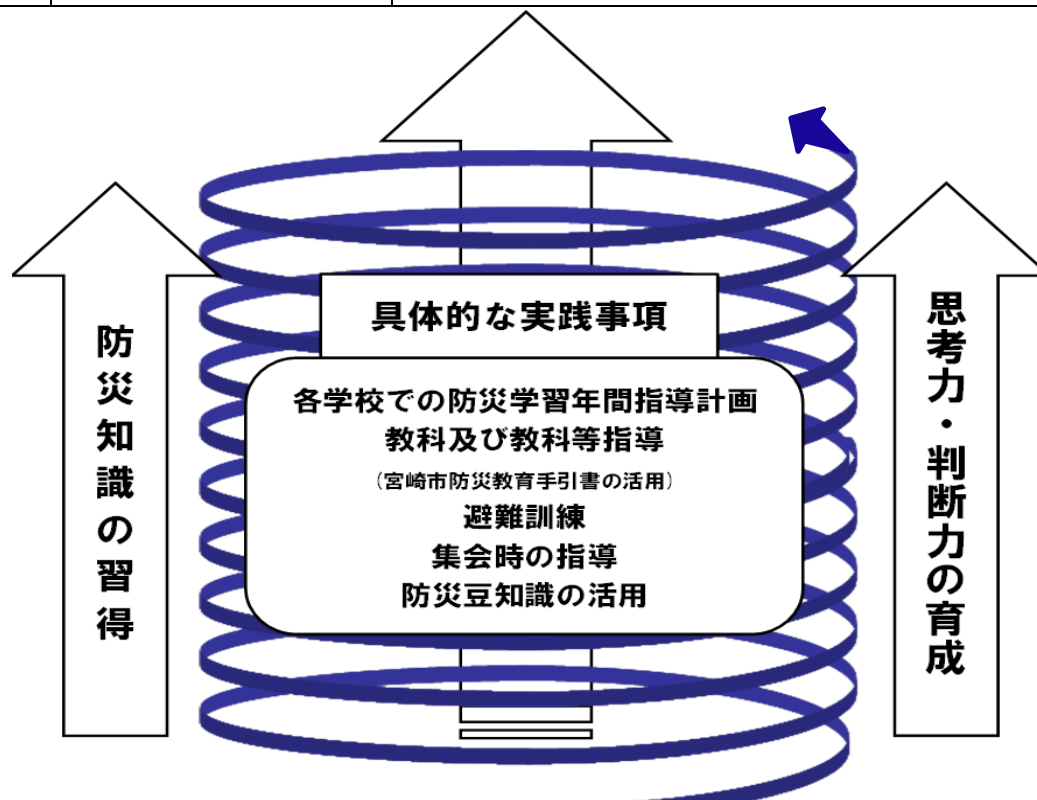
V 研究構想

**災害状況に応じて、自ら考え、判断し、
自他の命を守る行動ができるみやざきっ子の育成**



目指す児童生徒像

	下学年児童	上学年児童	中学生
身の守り方	適切な方法で頭を守ることができる。		
避難の仕方	すぐに高い所へ避難することができる。	周囲に声をかけ、適切な状況判断のもと、年下の子を連れて、すぐに高い所へ避難することができる。	周囲に声をかけ、適切な状況判断のもと、周囲の人を助けながら、率先して高い所へ避難することができる。
危機意識	大人と相談して避難する時の約束を決めておく。	その場に応じて災害状況を予測し、避難方法を考えておく。	

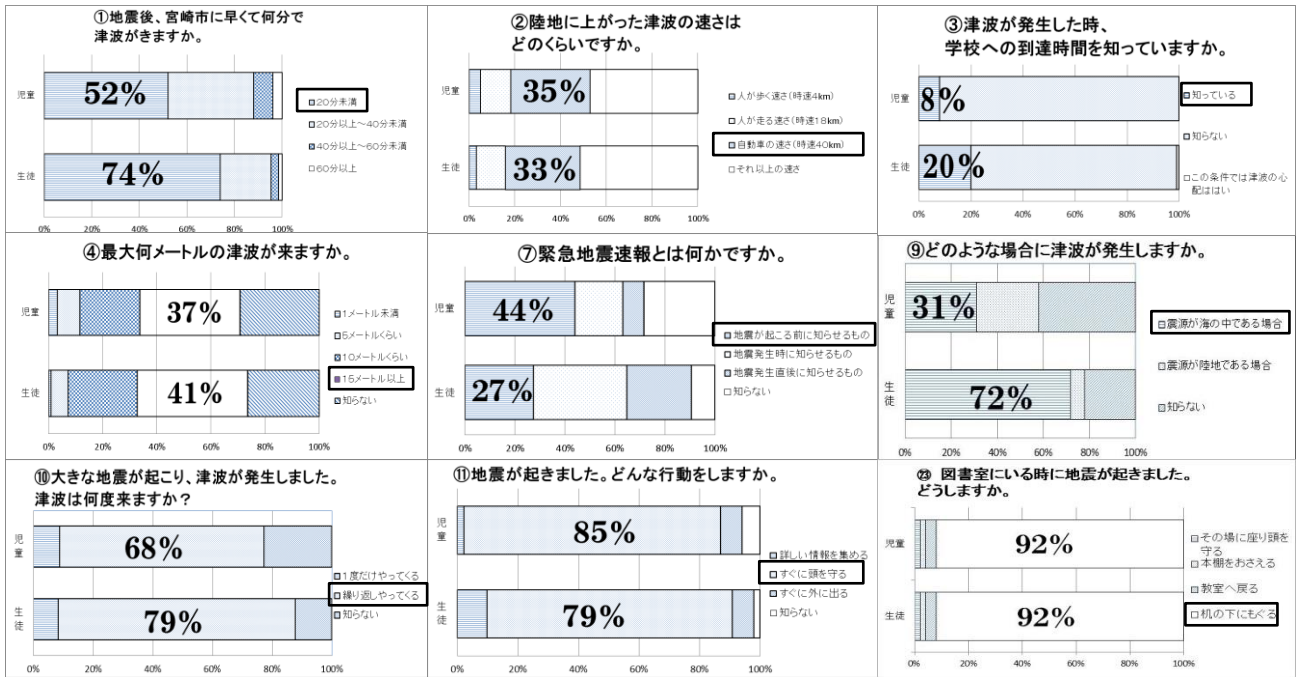


【図1 研究構想】

VI 研究の実際

1 実態調査・結果分析

平成27年7月に研究員の勤務する小学生225名と中学生373名を対象に地震・津波に関する実態調査を行った。次のグラフは、実態調査25項目の調査結果の一部である。



【図2 第1回実態調査結果】(表記されている数値は各質問に対する正答率を示す)

これらの結果を踏まえ、地震・津波に関する知識の向上や災害時に適切な判断のもとで行動できる児童生徒の育成を目指し研究することとした。

2 目指す児童生徒像

実態調査の結果を受け、どのような児童生徒を育成するかを明確にするために、目指す児童生徒像を考えた。

	下学年児童	上学年児童	中学生
身の守り方	適切な方法で頭を守ることができる。		
避難の仕方	すぐに高い所へ避難することができる。	周囲に声をかけ、適切な状況判断のもと、年下の子を連れて、すぐに高い所へ避難することができる。	周囲に声をかけ、適切な状況判断のもと、周囲の人を助けながら、率先して高い所へ避難することができる。
危機意識	大人と相談して避難する時の約束を決めておく。	その場に応じて災害状況を予測し、避難方法を考えておく。	

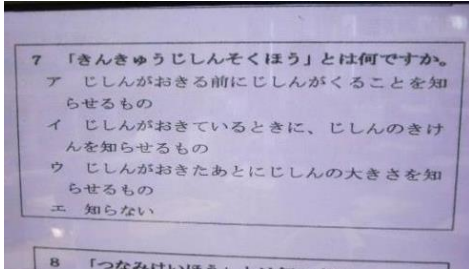
3 継続的な指導

地震・津波が起きた場合、自他の命を守る行動の基盤となる防災知識の定着は重要である。しかし、7月の実態調査では、基本的な防災知識が十分に身に付いていない現状が見られた。知識の定着が不十分であれば、災害状況に応じて自ら考え、判断し、適切に行動することは難しい。そこで、本研究では「防災豆知識集」を作成し、以下の11の知識を児童生徒に定着させられるように継続的な指導に取り組んだ。

1	大きな地震が起きた後には20分未満で宮崎市に津波が来る。
2	陸地が上がった津波の速さは自動車の速さ(時速40kmくらい)である。
3	地震が発生した場合の学校への津波到着時間(※津波の被害を受けると想定される学校のみ)
4	大きな地震が発生したとき宮崎市に最大15m以上の津波が来る。
5	自分が住んでいる地域の標高
6	自宅付近の避難所
7	緊急地震速報とは、地震が起きる前に地震発生を知らせるものである。
8	津波警報とは、津波が起こることを知らせるものである。
9	津波は震源が海の中である場合に起きる。
10	津波は1度だけではなく、繰り返しやってくる。
11	地震が起きたらまずは頭を守る行動をする。(校舎内・校舎外・地域)

(1) 指導の実際

具体的な指導は、週に1～2回の朝・帰りの会に防災豆知識集を実物投影機でテレビに映し出しクイズ形式で行った。また、いつでも振り返ることができるように教室に防災豆知識集を掲示した。さらに、小学校下学年においては、防災知識と関連した避難行動を実際に動作化させながら指導を行った。



【図3 大型テレビに映した問題】 【図4 机の下にもぐる児童】 【図5 教室に掲示した防災豆知識集】

(2) 実態調査の変容(正答率は、研究員が担任する学級を抽出して算出)

	定着させたい防災知識	校種	正答率 (%)	
			7月	12月
1	大きな地震が起きた後には20分未満で宮崎市に津波が来る。	小学校	55	99
		中学校	80	99
2	陸地が上がった津波の速さは自動車の速さ(時速40kmくらい)である。	小学校	32	95
		中学校	35	90
3	地震が発生した場合の学校への津波到着時間 (※津波の被害を受けると想定される学校のみ)	小学校	11	93
		中学校	40	73
4	大きな地震が発生したとき宮崎市に最大1.5m以上の津波が来る。	小学校	41	89
		中学校	47	85
5	自分が住んでいる地域の標高	小学校	25	47
		中学校	27	75
6	自宅付近の避難所	小学校	55	64
		中学校	45	82
7	緊急地震速報とは、地震が起きる前に地震発生を知らせるものである。	小学校	55	96
		中学校	27	78
8	津波警報とは、津波が起こることを知らせるものである。	小学校	69	100
		中学校	69	89
9	津波は震源が海の中である場合に起きる。	小学校	43	93
		中学校	80	98
10	津波は1度だけではなく、繰り返しやってくる。	小学校	67	100
		中学校	81	99
11	教室にいるときに地震が起きた場合、最初にする行動は机の下にもぐる。	小学校	96	91
	廊下にいるときに地震が起きた場合、最初にする行動はできるだけ窓から離れて座り、手で頭を守る。	小学校	89	93
	運動場にいるときに地震が起きた場合、最初にする行動は運動場の真ん中に座り、手で頭を守る。	小学校	72	99
	図書室にいるときに地震が起きた場合、最初にする行動は机の下にもぐる。	小学校	95	96
	階段にいるときに地震が起きた場合、最初にする行動は転落しないように座り、手で頭を守る。	小学校	74	92
	登下校時に地震が起きた場合、最初にする行動は建物から離れた所に座り、手で頭を守る。	小学校	66	99
	店内にいるときに地震が起きた場合、最初にする行動は物が落ちてこない所に座り、手で頭を守る。	小学校	57	93
		中学校	63	74
		中学校	97	99
		中学校	93	97

(3) 成果と課題

7月に比べ12月の正答率が向上していることから、防災豆知識集を活用した継続的な指導は児童生徒の防災知識の定着に効果があったと考えられる。今後は、「自分が住んでいる地域の標高」「自宅付近の避難所」の知識の定着を図るために家庭と連携した取組を進める必要がある。

4 防災知識を高い実践力につなげていく指導方法の工夫

昨年度の研究では、PDCAサイクルに基づく指導において、「避難訓練と授業との関連性」についての有効性が成果として得られた。本年度はさらに発展した研究として、学習して得られる防災知識を高い実践力につなげるために、思考力・判断力の育成を図る指導方法を工夫する。

そのため、宮崎市防災教育手引書の実践例をもとに、「2 宮崎市小中学校防災教育に関する基本的な考え方」にある「目指す子どもの姿」を発達段階別に具体化し、その具現化を目指す指導方法を研究した。

思考力・判断力の育成を図る有効性・有用性の高い指導方法を追究するため、過去の避難訓練の経験や実態調査などにより児童生徒の実態を的確に分析し、継続的な指導内容との関連を図ることができる授業を構築する。

以下、小学校と中学校の実践例を示す。

(1) 小学校での取組 (第2学年)

ア 継続的な指導・防災に係る授業・避難訓練の関連性

主な学習活動	内 容	継続的な指導内容との主な関連 (防災豆知識集)
1年次の避難訓練	・運動場で過ごす中、地震を想定した訓練を実施 ※ 教室へ戻る児童がいた (主体的な判断の欠如)	
2年次 4月避難訓練(全校)	・避難方法、避難経路、避難場所についての確認 ・「反省カード」による児童の振り返り (事後) 朝の会 ・「反省カード」を基にした課題解決 (話し合い)	
7月 実態調査	・実態調査の分析	
9月 避難訓練(全校)	・4月の避難訓練を受けて、課題を解決する 成果:「おはしも」の徹底、避難場所の確認	
10月 避難訓練(学級) 具体的初期動作について 実態調査	・図書室での避難訓練 ・実態調査の分析 ・児童の解答と実際の避難訓練の様子を関連付ける ・防災豆知識集の内容実践についての分析	・継 - 11
11月 関連した授業実践(学活)	・「自分の命は自分で守ろう」 ・図書室での主体的な避難行動	・継 - 11
1月 避難訓練(全校)	・児童の主体的な判断を図る避難訓練	

イ 防災教育の指導方法の工夫 (第2学年 学級活動)

【本時の目標】

図書室にはどんな危険があるのかを知り、身を守る実践を通して、よりよい身の守り方を考えることができる。

【思考力・判断力の育成のための手立て】

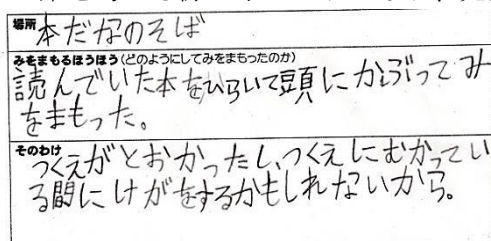
- 図書室で授業を行うことで、図書室での危険を考えやすくさせる。
- 映像や写真を活用することで、図書室での危険や身の守り方を考えさせる。
- ワークシートに避難行動の理由を書くことで、自分の考えを明確にさせる。
- 授業展開後段に学習した内容について活用する場を設けることで、身を守る実践をする。

ウ 学習指導過程

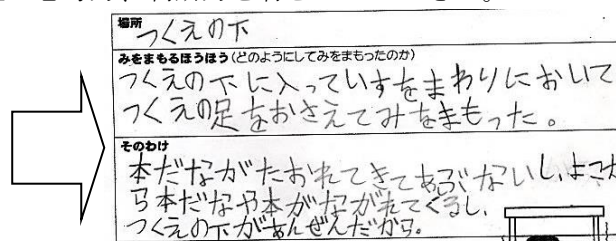
	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	準備
導入	1 図書室で地震が起きたらどのようなことが起きるのかを考える。 ・ 窓ガラスが割れる。 2 学習課題をつかむ。 じしんのときにあぶないところを知り、みをまもるほうほうを考えよう。	○ 防災の時間に見た DVD や避難訓練のことを振り返らせ、どのようなことが起きるのか考えさせる。 ○ 本時は身を守る方法を考えることを伝える。	
展開	3 地震がおきたことを想定して実際に身を守る行動をした時の映像を見て、話し合う。 ○ 本棚のそばで身を守る場面 ・ 机の下までは間に合わないから本棚のそばにいた。 ・ 本を3冊重ねて頭を守った。 ・ 動くとき他の物が倒れてくるからあぶないと思った。 ○ 机の下で身を守る場面 ・ 本やブックバックで頭を守った。 4 司書の先生の話聞く。 ○ 図書室での危険な場所と避難経路 5 よりよい身の守り方をまとめる。 ① ほんだなからはなれる。 ② いどうする時も頭をまもる。 ③ つくえのあしをおさえる。 ④ きょうりよくして、ひなんする。 6 図書室で身を守る行動を実践する。	○ 実際に地震が起きた時のことを考えて行動させた映像を見せて、よかったところや課題を出し合わせる。その際に図書室のどこにどのようにして身を守ったのか理由を含めて発表させる。 ○ 危険なことを回避するために、どのような行動をとることがよいのか話し合わせる。その際に、東日本大震災の際の映像を見せ、本棚のそばから離れないといけないことや小さな揺れから大きな揺れまでは5～6秒あること、机の脚を持たないといけないことに気付かせる。 ○ 司書の先生からアドバイスをもらうことで、危険なことが他にもあることに気付かせる。 ○ 実践したことや話し合ったことをもとにまとめさせる。 ○ 実際に実践させることで、理解をより深めさせる。	ワークシート パソコン テレビ
終末	7 学習の振り返りをする。	○ これからの生活をする上で自分の命は自分で守ろうとする意欲をもたせる。 ○ 地震に備え普段からできることを考え、気を付けていくことの大切さを伝える。	

エ 成果と課題

- 図書室で授業を行うことで、危険箇所の確認や実際にその場での初期動作を実践することができ、児童の実践力を高めることができた。
- 実際の東日本大震災の映像や避難行動に課題のある写真を提示したことにより、地震の状況に対する理解を深めることができた。
- ワークシートに避難行動の理由を書かせることで児童自らが考えを整理でき、よりよい改善策を考える際の手がかりとなり、児童の思考力、判断力を育むことができた。



【図6 授業前のワークシート】



【図7 授業後のワークシート】

- 授業展開後段に身を守る行動を実際に行うことで、確かな知識と行動を身に付けることができた。
- 「よりよい身の守り方」に係る発言の際には、自他の命を守るためにできることを考えた内容の発言が多く見られた。



【図8 授業前の身の守り方】



【図9 授業後の身の守り方】

- 他の場所でも同じような実践を行っていくことが実践力の育成につながっていくと考えられるので、これからも様々な場所を想定した実践を続けていく必要がある。
- 本時の授業は、学年の発達段階に応じて、年間指導計画のどこに位置付けていくのか考えていく必要があり、児童の安全を図る上ではより早い時期に行う方が効果的であった。

(2) 中学校での取組 (第1学年)

ア 継続的な指導・防災に係る授業・避難訓練の関連性

主な学習活動	内 容	継続的な指導内容との主な関連 (防災豆知識集)
5月上旬 第1回避難訓練	・ 避難経路、1次・2次避難場所、地区別集合の確認 (事後指導：帰りの会)→ 振り返り指導	・ 継 - 1・3・11 ・ 継 - 5
5月下旬 第2回避難訓練	・ 避難経路、1次避難場所、地区別集合の確認 (事後指導：帰りの会)→ 振り返り指導	・ 継 - 1・3・11 ・ 継 - 5
6月 実態調査	・ 実態調査の分析	
7月～10月 総合的な学習の時間の授業開始	・ 「自助」「率先避難」に必要な知識・技能の習得 ・ 地域の地震遭遇地点からの避難経路及び避難場所の検証	・ 継 - 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10
9月 第3回避難訓練	(事前指導)→ これまでの避難訓練の反省と必要な知識の確認(全校放送及び学級) (実 際)→ ①授業中②昼休み③朝自習における初期動作の訓練、職員による生徒への指導 (事後指導)→ 今回の避難訓練の反省と必要な知識の確認	・ 継 - 11
10月 文化発表会	検証結果を全校及び地域へ発信	
11月 第4回避難訓練	「緊急地震速報後」の初期動作の訓練(全校：授業中) (事前指導)→ 緊急性を重視し、事前伝達なし (実 際)→ 教科担任による生徒の危険回避行動(初期動作)の見届け (事後指導)→ 教科担任による指導	・ 継 - 7・8・11
1月 第5回避難訓練	これまでの反省を踏まえた内容で計画	

イ 防災教育の指導方法の工夫 (第1学年 総合的な学習の時間 全13時間)

【単元の目標】

地域の中で、防災(地震・津波)のテーマについて体験的・探求的に学習することを通し、「自助意識」の向上と「率先避難者」の資質や態度を身に付けることができる。

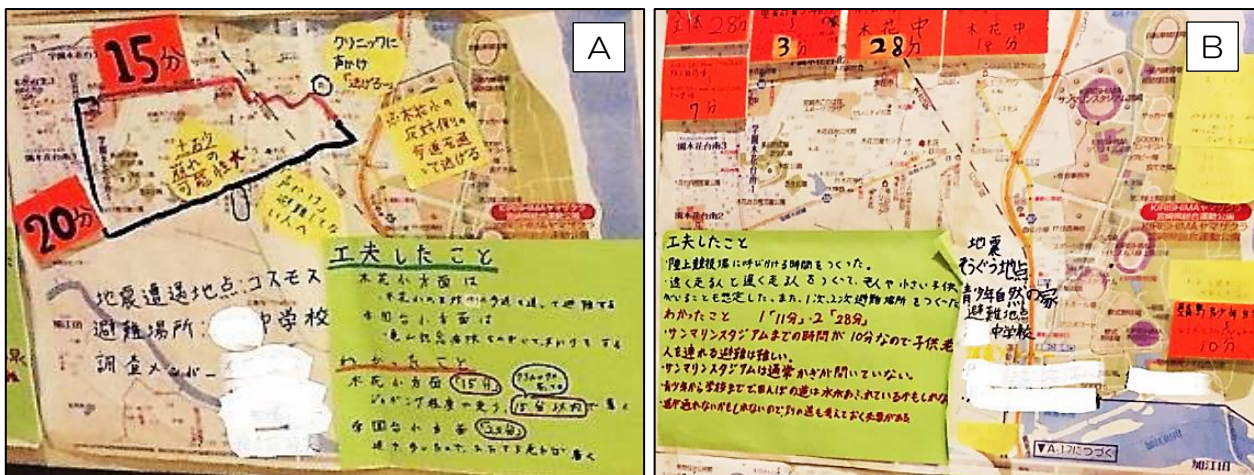
【思考力・判断力の育成のための手立て】

- PDCA サイクルを生かした単元指導計画を作成することにより、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に避難計画の工夫・改善に取り組ませる。
- 地域に即した的確な情報をもとに、具体的な避難計画を探求的に立てさせる。
- 自助に必要な知識を確認し、安全性の高い具体的な避難経路・避難行動を協同的に考えさせる。
- 図上訓練(避難計画)を基に実際に避難させ、避難経路を検証させる。

ウ 学習指導過程(単元指導計画：全13時間)

単元指導計画		指導計画	
日程			
7月9日		<p>【オリエンテーション(課題の確認)】</p> <p>東日本大震災のVTRを見て、感想や意見交換をする。 ・すごい。 ・被害が大きい。 ・忘れそうになっていた。</p> <p>↓</p> <p>本時の課題【中学生になった今、防災について自分たちで何ができるかを考え直す。】 ①「中学生になってVTRを見た今の自分に、小学生の時とは違うどんな「気付き」があるだろうか？」(一斉)</p> <p>↓</p> <p>本時の学び</p> <p>本コースのテーマである「防災」についての学びは、生きる上で、大変意義があり、中学生になった現在、自分にどれだけのことができるか、再検討する必要がある。</p>	① / 13
9月18日 5校時		<p>【具体的な目標と調査項目の設定】</p> <p>学年全体のアンケート結果を振り返り、自分たちの課題を見つけ、認識する。 「今の木花中1年生の実態からどのような課題が見えてくるだろうか？」 ・知らない人が多いなあ。 ・今のままではいけない。</p> <p>↓</p> <p>目指す生徒像を確認する。</p> <p>『率先避難者』 周囲に声をかけ、適切な状況判断のもと、周囲の人を助けながら、率先して高い所へ避難することができる生徒</p> <p>↓</p> <p>本時の課題設定【本校生徒が、率先避難者になれるための学習項目を見つけろ。】 ②「本校の生徒が『率先避難者』になるために、私たちは、何を調査し、明らかにしていく必要があるだろうか？」</p> <p>↓</p> <p>実際に調査・探求の必要な項目についてグループで話し合う。</p> <p>本時の学び</p> <p>アンケート結果より、今後、自分たちが学ぶ内容は、まず自らが「いつでも」「どこでも」率先避難者になれるよう、調査・探求をしていかなければならない、ということである。</p>	② / 13
9月18日 6限目		<p>【調査計画の設定】</p> <p>本時の課題設定 調査・探求の必要な項目について、解決したい問題を挙げ、解決方法を計画する。</p> <p>↓</p> <p>ワークシートに取り組み、各グループで具体的な計画を立てる。</p> <p>本時の学び</p> <p>調査・探求する計画を通して、これまでの学習では実際に対応できないケースを具体的に想定でき、体験的に学習する必要がある。</p>	③ / 13
10月1日 5・6限目		<p>【調査・探求】検証①</p> <p>計画(ワークシート)に基づく調査・探求を行う。</p>	④ ⑤ / 13
10月7日 5・6限目		<p>【調査・探求】検証②</p> <p>調査・探求によって明確になった新たな課題を解決する調査・探求を行う。 「避難設定時間は、予想通りだったか？」 「避難中、公園や施設等、呼びかける余裕はあったか？」 「避難経路は、安全性が高い経路だったか？」</p>	⑥ ⑦ / 13
10月14日 5・6限目		<p>【中間報告準備①】</p> <p>自分たちが学習してきたことを振り返り、まとめる。 Ⅰ：最初の予想(P)→ Ⅱ：検証①(D) → Ⅲ：検証②(CAPD) → Ⅳ：まとめ(C) → Ⅴ：今後に向けて(A)</p>	⑧ ⑨ / 13
10月15日 1・2限目		<p>【中間報告準備②】</p> <p>自分たちが学習してきたことを振り返り、まとめる。 まとめてみて気付いた新たな課題をまとめ、解決の方法を考える。</p>	⑩ ⑪ / 13
10月17日 5・6限目		<p>【中間報告リハーサル】</p> <p>全校に防災に係る学校の現状を発信し、視聴者の感想を参考に新たな課題を設定する。</p>	⑫ ⑬ / 13





【生徒の作成した避難計画及び活動報告の考察より】

報告 A 班では、当初ハザードマップより、「土砂崩れの危険性」「クリニックへの声かけ」など、避難時の危険回避や周囲への声かけを積極的に計画した。しかし、検証後にまとめたマップでは、2つの避難ルートに要した時間から、①どのくらいの速度で避難すべきか②避難中にどのような声かけができるかについて実体験より導き出すことができています。

一方、報告 B 班では、高台にある学校への避難が困難なことから、指定されている一次避難場所へ一旦避難し、事態収束を待って、学校へ移動する計画を立てた。当初の図上訓練では、一次避難所へ余裕をもって到着できるため、高齢者や幼児などを誘導し、一緒に避難するつもりであった。

しかし実際に検証してみると、そのことが「困難である」ことを認識した。加えて一次避難所付近の道が「液状化」した際の避難に慎重さが必要であり、実際は「より時間がかかること」も確認できた。また、一次避難所入口に施設がしてあったため、実際に地震が起きたときの問題点も指摘している。

その他の班の報告においても、「高架道路の倒壊」「線路・踏み切りの崩壊」「狭い住宅地における路地の封鎖」「液状化による農道の判別が困難」など、実際に走ってみて気付いた新たな課題が多く発見され、より質の高い避難計画を再設定する上で、大いに役立つ成果を上げた。

エ 成果と課題

- 実際に避難計画を体験的に検証することにより、習得した知識を活用でき、生徒自らがその場で新たな課題に気付くことができた。このことは、より安全に率先して避難する上で、必要となる要素を自ら考え、判断することにつながり、質の高い避難計画を設定できた。また、自他の命を守りながら率先避難者としての資質の向上と態度の育成ができたと言える。
- 中学生の発達段階に応じた「目指す生徒像」を示すことで、使命感が高まり、単元指導計画(全13時間)に沿って意欲的な学習活動を継続することができた。各班の避難計画では、全ての班に「声をかけながら避難する」とことと、「どこで、誰に」声かけをするのかが明記されていた。また検証の結果、「自助を優先した率先避難者」としての実践力が備わった。
- 文化発表会での防災コースの発表は、他のコース及び他学年の生徒からの反響が高く、発表後は、調査したマップを常設掲示物とするなど、調査内容の周知拡大につながった。
- 防災コースで習得した知識を、本コースの生徒以外にも確実に定着させるために、繰り返し全体に伝達したり、学校で行われる防災教育や避難訓練と関連付けながら、全職員で組織的に指導を行ったりしていく必要がある。

- 今回の1学年での学習活動の主題に迫る有効性は十分に認められた。今後、毎年継続して実施していくためには、総合的な学習の時間における単元指導計画と各教科等との関連をさらに図りながら、習得させたい知識・技能について、職員の組織的な連携協力のもと引き継ぎと改善を加えていく必要がある。

VII 成果と課題

1 研究の成果

- ・ 朝・帰りの会において、「防災豆知識集」に係る継続的な指導を行うことで、防災に関する基礎的な知識の定着を図ることができた。また、「防災豆知識集」で習得した知識をもとに、授業を組み立てたり、様々な危険となる場面を想定させたりするなど幅広く活用することができた。
- ・ 「宮崎市防災教育手引書」を基にした授業実践では、防災に関する知識を習得させるだけでなく、検証活動を取り入れたり、児童生徒の行動を振り返らせたりすることで、習得した知識を活用させ、自ら考え、判断することができる児童生徒の育成を図ることができた。
- ・ 継続的な指導・防災に係る授業・避難訓練の3つの実践を関連付けることで、学校を取り巻く環境や児童生徒の発達段階に応じた効果的な指導を行うことができ、適切な避難行動がとれる実践力を育成することができた。

2 研究の課題

- ・ 防災教育は、各学校の実態や児童生徒の発達段階に応じて行われるべきものである。これらの研究内容を、研究対象校以外で取り入れて実施する際には、学校や児童生徒の実態に応じた指導内容の精選や補足的な指導が必要と考える。
- ・ 継続的な指導・防災に係る授業・避難訓練の3つの実践を関連付け、より指導の効果を高めるためには、児童生徒の発達段階に応じて長期的な視点に立った指導をしていく必要がある。そのためには、小学校6年間あるいは中学校3年間を見据えた全体指導計画が必要と考える。

<引用・参考文献>

- | | |
|---|--------------------|
| ○ 「小学校学習指導要領」文部科学省 | ○ 「中学校学習指導要領」文部科学省 |
| ○ 宮崎市防災教育手引書 宮崎市教育委員会 | |
| ○ 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育（文部科学省、平成22年3月） | |
| ○ 学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き（文部科学省、平成24年3月） | |
| ○ 宮崎市津波ハザードマップ（宮崎市、平成25年12月） | |

<研究同人>

宮崎市教育情報研修センター			
所 長	江藤	宏	
指導主事	金丸	賢一	
研 究 員	錦織	謙一（恒久小学校）	櫛間 亨（木花中学校）
	秋山	俊介（木花小学校）	兒玉 淳（宮崎中学校）
	春園	真由美（小松台小学校）	蓑毛 洋貴（清武中学校）

宮崎市教育情報研修センター

キャリア教育研究班

I	研究主題	・・・・・・・・	1-6-1
II	主題設定の理由	・・・・・・・・	1-6-1
III	研究目標	・・・・・・・・	1-6-1
IV	研究仮説	・・・・・・・・	1-6-2
V	研究構想	・・・・・・・・	1-6-2
VI	研究の実際	・・・・・・・・	1-6-2
1	実態調査	・・・・・・・・	1-6-2
(1)	調査の意図	・・・・・・・・	1-6-2
(2)	調査方法	・・・・・・・・	1-6-2
(3)	調査の結果分析	・・・・・・・・	1-6-2
(4)	本年度の研究の方向性	・・・・・・・・	1-6-3
2	めざす児童生徒像	・・・・・・・・	1-6-3
3	理論研究	・・・・・・・・	1-6-3
(1)	指導計画の整備～本年度のSPDCAサイクルのとらえ方～	・・・・・・・・	1-6-3
(2)	児童生徒の活動記録のポートフォリオ化	・・・・・・・・	1-6-4
(3)	課題解決の手立ての工夫	・・・・・・・・	1-6-4
4	授業研究	・・・・・・・・	1-6-5
(1)	小学校における検証授業	・・・・・・・・	1-6-5
(2)	中学校における検証授業	・・・・・・・・	1-6-7
5	児童生徒の変容	・・・・・・・・	1-6-9
VII	成果と課題	・・・・・・・・	1-6-10
1	成果	・・・・・・・・	1-6-10
2	課題	・・・・・・・・	1-6-10

～引用・参考文献、研究同人～

I 研究主題

全体研究主題

「生きる力を育む教育活動の創造」
～自ら考え、判断し、行動できるみやざきっ子の育成をめざして～

各班研究主題

防災教育研究班

キャリア教育研究班

キャリア教育を通して、自ら考え、判断し、行動できるみやざきっ子の育成
～課題解決学習を通じた基礎的・汎用的能力の向上をめざして～

II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められていることから、基礎基本の確実な定着はもちろんのこと、キャリア教育・安全教育など今日的課題に対して教科等を横断して指導することが重要視されている。

本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着をもつ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定されており、その中に、確かな学力やキャリア教育等の充実が基本目標として掲げられている。さらに、本市の重点目標である防災教育の充実においても、東日本大震災の教訓や日向灘域の地震発生の可能性を受け、平成24年度より市内の小中学校に新たに防災主任を位置付け、「宮崎市防災教育手引書」を作成したところである。なお、平成25年度までに、市内すべての小中学校のコンピュータを入れ替え、教育の情報化のさらなる推進にも努めているところである。

これらの社会や本市の状況を踏まえ、本研究班においては、平成24年度より、「自分のよさや可能性などに気付き、自らの将来を考え、自分らしい生き方を実現していこうとする態度を育成するキャリア教育の指導の在り方」について研究を進めてきた。昨年度は、研究に先立ち実態調査を行った結果、特に「課題対応能力」と「キャリアプランニング能力」に課題が見られた。そこで、研究の方向性として、特別活動を中心とした「日常的・継続的なキャリア教育の在り方」を探ることにした。各発達段階に応じた、キャリア教育の在り方を明確にするために「キャリア発達段階表」を作成した。また、「S（動機付け）」の段階を加えたSPDCAサイクルに基づく課題解決学習に取り組んだ。さらに、課題解決のために、より主体的な取組を促すとともに、思いや願いを可視化するための「書く活動」などの手立てを講じた結果、「課題対応能力」については、十分な向上が見られた。しかしながら、「キャリアプランニング能力」については、期待したほどの成果を上げることができなかった。

そこで本年度は、十分に成果が得られなかった「キャリアプランニング能力」の育成に主眼を置き、昨年度の研究に引き続き「基礎的・汎用的能力」の向上をめざすことにした。

このことにより、全体研究主題である『「生きる力を育む教育活動の創造」～自ら考え、判断し、行動できるみやざきっ子の育成をめざして～』に迫ることができるであろうと考え、本主題を設定した。

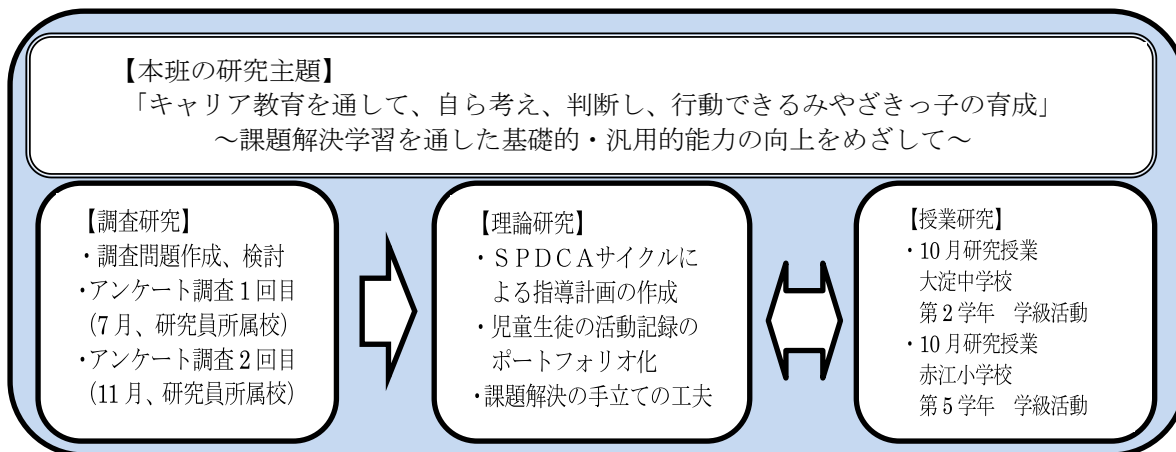
III 研究目標

「基礎的・汎用的能力」を育成するために、キャリア教育の視点に立った効果的な指導方法の在り方を検証する。

IV 研究仮説

キャリア教育の視点で、特別活動を中心に指導計画を整備し、SPDCAサイクルを取り入れた課題解決学習を行えば、児童生徒の「基礎的・汎用的能力」を向上させることができるであろう。

V 研究構想



VI 研究の実際

1 実態調査

(1) 調査の意図

児童生徒のキャリア教育における4つの「基礎的・汎用的能力」において、課題となる傾向を明らかにする。

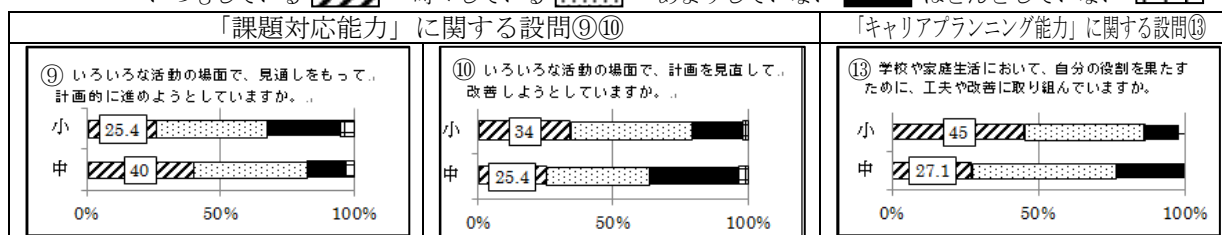
(2) 調査方法

調査問題は、「小学校キャリア教育の手引き」を基に作成した。小・中学校におけるそれぞれのキャリア発達課題の特徴を踏まえ、4つの「基礎的・汎用的能力」に対して設定した。平成26年度の研究の課題であった「課題対応能力」と「キャリアプランニング能力」については、設問を増やした。質問内容を具体的に改定し、実態調査を行った。

(研究員所属校：小・中学校6校、計761名、実施時期：7月)

(3) 調査の結果分析

いつもしている 時々している あまりしていない ほとんどしていない



【図1 キャリア教育実態調査結果 (一部)】

実態調査のうち、「いつもしている」という選択肢の回答割合が低かった設問について、調査結果の分析を行った。【図1】のように、「課題対応能力」に関する設問では、小・中学校では⑨⑩が低い割合を占めた。この結果から、いろいろな活動の場面で、課題に対して見通しをもち、「計画立案」や「改善」する力を一層高めていく指導の充実が必要であると考えられる。

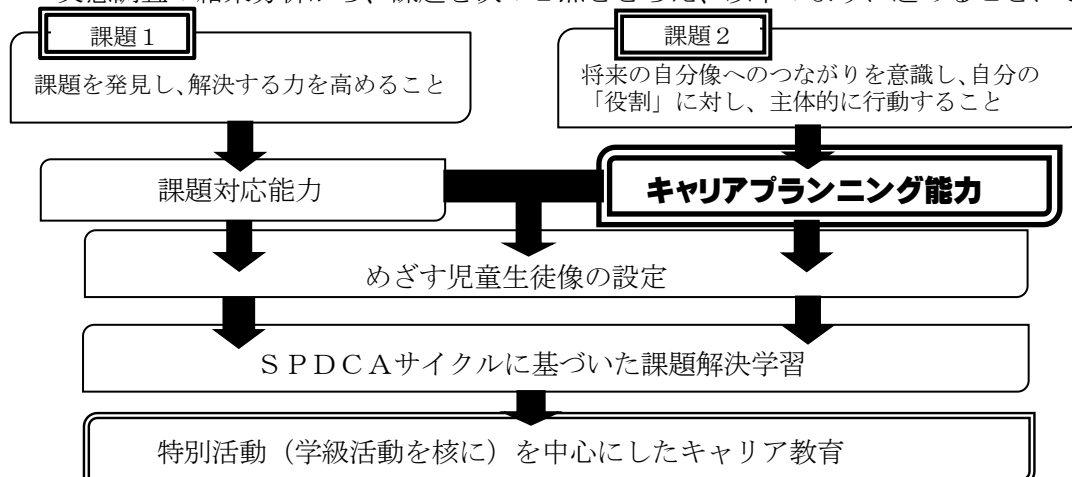
「キャリアプランニング能力」については、平成26年度同様、小・中学校ともに低い傾向が見られた。発達段階が上がるにつれ、人間関係が広がり、社会の一員としての自

分の「役割」に対する意識が芽生え、責任も大きくなっていく。また中学生は、高等学校入学試験など現実的な進路選択を迫られ、自分の将来の生き方を模索するとともに、具体的に夢や目標をもつ時期となる。「役割」に対し、主体的に行動を改善する場面が多くなる。そのため、特に③の「役割」を果たすことにおいて「工夫・改善」の能力を高める手立てが必要であることが分かる。

児童生徒が自分らしい生き方を実現していくために、小・中学校を通して自分の「役割」を見いだすための継続的な指導の工夫が必要であると考ええる。

(4) 本年度の研究の方向性

実態調査の結果分析から、課題を次の2点ととらえ、以下のように進めることにした。



特別活動の目的とキャリア教育のめざす方向性に重なりが見られるので、本研究では、昨年度の研究を継続し、上記のように特別活動を中心としたキャリア教育を進めることにした。

2 めざす児童生徒像

課題を基にめざす児童生徒像を以下のように設定し、研究を進めることにした。

【表1 めざす児童生徒像】

能力名	本研究班のめざす児童生徒像
人間関係形成・社会形成能力	他者を尊重・理解し、その場に合った言動がとれ、他者と協力できる児童生徒
自己理解・自己管理能力	自分自身のよさに気付き、よさを発揮するとともに、自らを律しつつ、主体的に学び、行動する児童生徒
課題対応能力	これまでの自分を振り返り、自ら課題を見付け、思いや願いをもち、見通しをもって解決しようとする児童生徒
キャリアプランニング能力	集団における自己の「役割」を果たすことに意義を見いだす児童生徒

上記の「基礎的・汎用的能力」は、包括的な能力概念である。

したがって、この4つの能力は、それぞれが独立したものではなく、相互に「関連・依存」した関係にあることから、「キャリアプランニング能力」に対して働きかけることで、他の3つの能力も向上することが考えられる。

3 理論研究

(1) 指導計画の整備～本年度のSPDCAサイクルのとらえ方～

SPDCAサイクルとは従来のPDCAサイクルに「S（動機付け）」を加え、児童生徒に課題意識をもたせたり、意欲を高めたりするための手立てである。本研究では、「役割」を、「児童生徒が、学校や家庭、地域内、また、様々な状況において、それぞれが置かれた立場

の中で果たすべきこと」ととらえる。小学校では係活動を、中学校では学校行事を題材として選び、日常的・継続的にSPDCAサイクルでつなげることで、「役割」の意識が高まり、キャリアプランニング能力を育成できると考えた。

ア 「C（評価）」「A（改善）」に重点を置いたSPDCAサイクル

児童生徒は、自分の「役割」を振り返る活動を繰り返すことで、自分の課題に気づき、今ある取組を見直し、新たな目標を設定できる。それが次の活動に向けて自分の「役割」を意識することになる。

そこで、「C（評価）」「A（改善）」の段階に重点を置き、SPDCAサイクルをつなげることにした。

イ 「S（動機付け）」のとらえ方

本年度は、「S（動機付け）」を、特に「役割」を意識するための段階ととらえた。



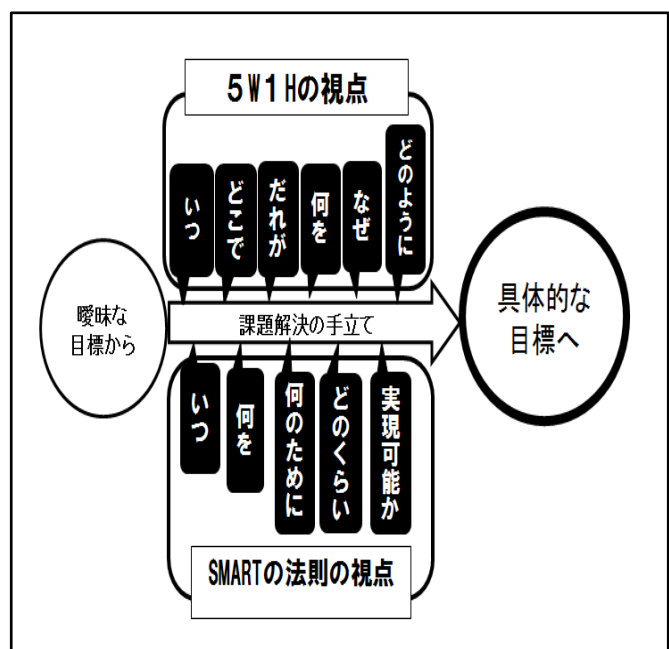
【図2 SPDCAサイクルによる指導計画のつながりの一例】

(2) 児童生徒の活動記録のポートフォリオ化

学びの成長や変容の過程を可視化したり蓄積したりしていくことで、児童生徒が「役割」の意義を実感し、意識を継続し高めていく。そのための手立てを講じる必要があると考えた。その際、児童生徒が簡単にいつでも振り返りが行えるように、一目で分かる振り返りカードを作成したり、掲示を工夫したりするようにした。このことを、「ポートフォリオ化」ととらえることにした。

(3) 課題解決の手立ての工夫

児童生徒が課題解決を行う際に、そのための道筋や方法について具体的な視点で考える手段を身に付けさせることにした。そうすることで、課題解決や目標達成に向けて、児童生徒が主体的に見通しをもち、具体的かつ実現可能な方法を見いだして取り組むことができると考えた。そこで、小学校においては「5W1H」、中学校においては「SMARTの法則」を手立てとして講じることにした。



【図3 課題解決の手立て】

4 授業研究

今回の研究では、以下の3つをポイントとし、検証授業を行っていくことにした。

ポイント1	SPDCAサイクルによる指導計画の作成
ポイント2	児童生徒の活動記録のポートフォリオ化
ポイント3	課題解決の手立ての工夫

(1) 小学校における検証授業 (赤江小学校 第5学年)

検証授業の概要

題材 学級活動 「2学期の係活動をよりよいものにしよう」
 内容(2)のエ 「清掃などの当番活動の役割と働くことの意義の理解」

ポイント1 SPDCAサイクルによる指導計画の作成

学級活動の題材を見てみると、「役割」を意識させることのできる題材が点在している。そこで、SPDCAサイクルによりそれらの題材と題材を「つなぐ」ことを意識した指導計画を作成した。このことにより、1つの題材における「A(改善)」が次のサイクルにつながるものと考えた。

※太枠は学級活動の題材

期日	SPDCA サイクル	活動の内容	指導上の留意点
4月	サイクル①	Standing (動機付け) Plan(計画)	・活動の目的を意識させるために、係活動の意味について考えさせる。 ・学級活動において計画を立てさせる。
4月 ～		Do(実行)	・活動計画に沿って活動を行う。
9月		Check(評価)	・振り返りシートに記入する。 (係・委員会・学校行事)
10/6 (火)	サイクル②	Check(評価) Action(改善) 検証授業	・振り返りシートを活用し、1学期の係活動の振り返りを行わせる。 ・1学期の振り返りをもとに、2学期の工夫・改善について話し合わせる。
10/15 (木)		Standing (動機付け) Plan(計画)	・活動の目的を意識させるために、再度、係活動の意味について考えさせる。 ・学級活動において計画を立てさせる。
10月 ～		Do(実行)	・活動計画に沿って活動を行う。
10月 ～	サイクル③	Check(評価)	・振り返りシートに記入する。 (係・委員会・学校行事)
3月		Action(改善) Standing (動機付け)	・振り返りシートを活用し、2学期の係活動の振り返りを行わせる。 ・2学期の振り返りをもとに、6年生としての「役割」について話し合わせる。

学習指導過程

段階	学習内容及び活動	指導上の留意点
導入	1 1学期の活動を振り返る。 ○ 係活動の目的 ○よかった点 ○ 課題 2 本時のめあてを確認する。	○ 1学期の係活動の振り返りを行う視点として、「係活動の目的」を想起させる。 ○ 1学期の活動についての課題を意識させ、本時のめあてをつかませる。 ポイント2
	2 2学期の係活動をよりよいものにするために、工夫や改善ができることを考えよう。	○ 本時は、2学期の係活動をよりよいものにするために、工夫や改善できることを具体的に考えていくことを確認する。
展開	3 2学期の係活動について話し合う。 ○ 係活動で工夫・改善できること	○ 今回は係活動についてのみ話し合わせる。 ○ 「5W1H」により、工夫・改善を考える際の視点を与える。 ポイント3
	(視点) 5W1H ・だれが(Who) ・何を(What) ・いつ(When) ・どこで(Where) ・なぜ(Why) ・どのように(How)	○ 個人で考えをまとめさせた後、係ごとに話し合わせ、振り返りシートや友達からのアドバイスをもとに、工夫・改善できることについて考えさせる。 ポイント2
終末	4 本時の学習を振り返る。 ○ 各係で話し合ったことを発表し合う。 ○ 個人として2学期の係活動でがんばりたいことを書く。 【キャリアプランニング能力】 ○ 次時の活動の見通しをもつ。	○ 各係で話し合ったことを発表させることにより、学級全体でそれぞれの活動内容を確認できるようにするとともに、実践意欲を高めるようにする。 ○ 係としての工夫・改善を個に返すために、個人として努力したいことを記入させる。

ポイント2 児童生徒の活動記録のポートフォリオ化

「係活動」、「委員会活動」、「学校行事」の3つの活動についての振り返りを行わせるために右の【図4】のような振り返りシートを活用した。

諸活動の成果や課題を可視化し蓄積するとともに、様々な場面における自身の傾向を把握することができるようにした。

年 組 ()		
係活動	委員会活動	学校行事
月 日	月 日	月 日
月 日	月 日	月 日
月 日	月 日	月 日
月 日	月 日	月 日

このことにより、【図5】のように、回数を重ねるごとに自身の活動を振り返り、工夫・改善しようとする記述が見られるようになった。また、その記述が具体的な行動につながった。

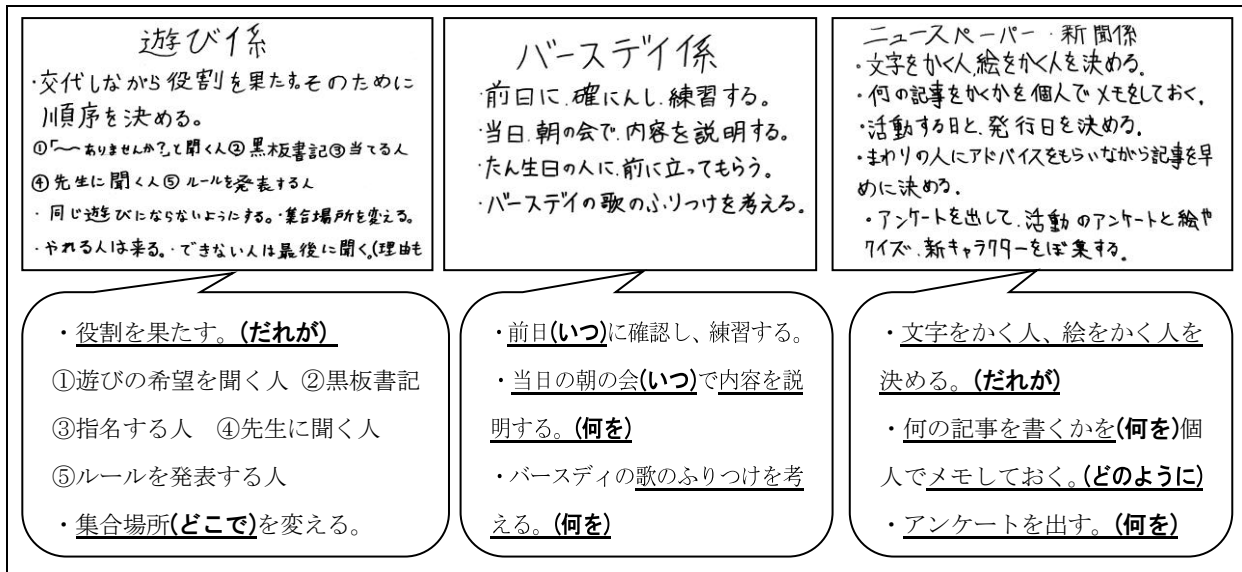
【図5 「振り返りシート」の記述】

ポイント3 課題解決の手立ての工夫

課題解決の手立ての工夫として、活動の工夫・改善をする際に「5W1H」の視点を与えた。

「だれが」「何を」「いつ」「どこで」「なぜ」「どのように」の6つの視点に沿って工夫・改善した案を記述させた。

このことにより、下の【図6】のように、児童はより具体的に考えることができるようになった。



【図6 「5W1H」の視点に沿った児童の記述】

(2) 中学校における検証授業 (大淀中学校 第2学年)

検証授業の概要

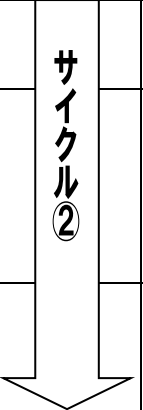
題材 学級活動 合唱コンクールを成功させよう

内容(1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

ポイント1 SPDC Aサイクルによる指導計画の作成

体育大会と合唱コンクールをSPDC Aサイクルでつなぐことで、自分の「役割」を理解するとともに、課題解決や目標達成のための具体的な計画を立てて実践することができる考えた。
 ※太枠が検証授業

期日	SPDC A サイクル	活動の内容	指導上の留意点
体育大会前	サイクル①	Standing (動機付け) Plan (計画) ・構成的グループ・エンカウンターエクササイズを行う。 ・体育大会に向けた個人目標を決める。	・班を団ごとに構成し、構成的グループ・エンカウンターエクササイズを行わせ、「協力する」重要性を理解させる。 ・自分の役割を明確にして個人目標を立てさせる。
体育大会		Do (実行) ・自分の役割を意識して体育大会に臨む。	・練習を振り返り、目標達成のための活動意欲が高まるよう助言する。
体育大会後		Check (評価) Action (改善) ・体育大会を振り返る。 ・合唱コンクールの目的を確認する。 ・クラスのテーマを決めてパートの課題を考える。	・体育大会の反省を生かした話し合いができるよう、ワークシートを工夫する。
合唱コンクール前	サイクル②	Standing (動機付け) Plan (計画) 検証授業 ・グループ活動で大切なことを確認する。 ・合唱コンクールに向けたパートの目標を決める。	・班をパートごとに構成し、構成的グループ・エンカウンターエクササイズを行わせ、「役割を果たす」重要性を理解させる。 ・SMARTの法則を活用して、パートごとの具体的な目標を立てさせる。

日常		Check (評価) Action (改善)	・合唱の練習を行う。 ・帰りの会で練習の反省を行う。	・掲示物を活用して、目標の達成状況を確認しながら練習を進めさせる。
合唱コンクール		Do (実行)	・自分の果たす役割を意識して合唱コンクールに臨む。	・今までの話合いや、練習について振り返り、合唱テーマ達成へ向けての活動意欲が高まるよう助言する。
合唱コンクール後		Check (評価) Action (改善)	・合唱コンクールを振り返る。	・合唱コンクールの目標達成から、今後の学校生活に向けて、SPDCAサイクルを意識させる。

学習指導過程

段階	学習内容及び活動	指導上の留意点
導入	1 前時に話し合った意見を確認する。 ○ クラステーマ ○ どんな合唱にしたいか 2 本時のめあてを確認する。 クラステーマを達成するために、具体的なパートの目標を決めよう。	○ 前時に話し合った意見を確認し、本時のめあてをつかませる。 ○ 課題を達成するために具体的な目標を立てる必要性を理解させ、学習の見通しをもたせる。
展開	3 エクササイズ「ももちゃんのおつかい」を行う。 ① 班に分かれる。 ② 指示書、情報カードをもとに、互いの情報を伝え合う。 ③ 班の答えを発表する。 ④ 正解を確認する。 4 うまくいったこと・うまくいかなかったことを(1つずつ)班で話し合い、全体で発表する。 5 グループ活動で大切なことを確認する。 6 各パートの課題を確認し、課題を解決するためのパートの目標を立てる。 【キャリアプランニング能力】 ① 個人でパートの目標を考える。 ② 班でパートの目標を話し合う。	○ 活動後に発表することを伝え、活動に見通しをもたせる。 ○ 同じ課題意識をもたせるため、班はパートごとに構成する。 ○ 役割を果たし、積極的に課題解決に取り組ませるため、活動の注意点を示す。 ○ グループ活動では自分の役割を果たすことが重要であることを理解させ、後の活動に活かせるようにする。 ○ 「SMARTの法則」に則って、目標を具体的にさせる。 ポイント3 ○ 「R 何のために(活動の目的)」を確認させる。 ○ 「M どのくらい」「Tいつ」を特に明確にさせる。 ○ 決めた目標を可視化するために常時掲示することを伝える。 ポイント2
終末	7 話し合ったことを発表する。	○ クラステーマの達成に向けた意欲を喚起するために、各班の話し合ったことを発表させる場を設ける。

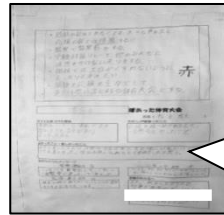
ポイント2 児童生徒の活動記録のポートフォリオ化

SPDCAサイクルによる指導計画に併せて、行事に向けた目標や振り返りを掲示することで、変容を可視化した。【図7】【図8】



僕は役員やリーダーになっていませんが、自分の**役割**として声を出して応援することが**役割**だと思うので、そこを頑張りたいです。
特に入場行進の足を上げたり手を大きく振ったりするところは誰にも負けないように頑張ります。

【図7 体育大会 個人カード】

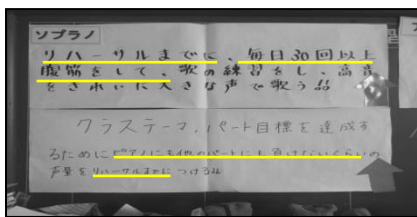


団が優勝に近づくために、朝や放課後を使って、みんなが練習できるときに、バトンパスの練習を10回ほどしたので、本番でとてもいいバトンパスができた。

【図8 体育大会の反省 ワークシート】

ポイント3 課題解決の手立ての工夫

課題解決のためには、状況把握と具体的な目標設定が必要である。目標が具体的であると実行すべきことが明確になると考えた。そこで、行事の前には「SMARTの法則」を用いて具体的な目標を立て、行事の後は自己評価と、目標設定の振り返りを行った。検証授業では、合唱コンクールに向けて、「SMARTの法則」を用いてパートごとの具体的な目標を立てさせた。【図9】行事の前後で、生徒の目標設定のコメントに変容が見られた。【図10】



- T (いつ・いつまでに)
- ・リハーサルまでに
- M (どのくらい)
- ・毎日30回以上腹筋をして
- ・ピアノにも他のパートにも負けないくらい

【図9 パートごとの目標の例】

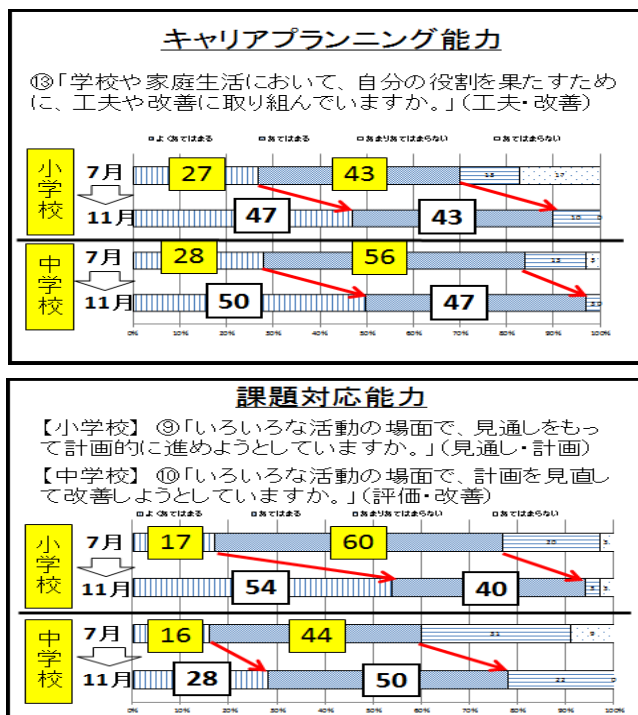
体育大会の後（9月中旬）	変容	合唱コンクールの後（10月下旬）
<p>私は団が応援優勝するために、3年生が抜けているときや団技など声だしのときに、声がかれるくらい大きな声を出した。団のために少しでも役に立つことや去年できなかったことをやるつもりで頑張った。<u>目標設定が曖昧だった。</u></p>		<p>パート練習で音量を意識しはじめたときに、何かが変わったと思う。本番は歌っているときに完璧だと思ったが動画を観たらまだまだだった。もう少し目標の中に、時間などの具体例を入れた方がよかったかなと思った。<u>自分がどうしたいのか、今の状況はどうなのか、何が足りないのかなどをもっと含めて目標にすればもっと分かりやすい具体性もある目標が出来上がると思う。</u></p>

【図10 目標設定についての振り返りコメント】

5 児童生徒の変容

検証授業実施校において、11月に2回目のキャリア教育についての実態調査を実施した。小・中学校における、「課題対応能力」と「キャリアプランニング能力」の7月から11月にかけての変容を見たところ、それぞれの能力において、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた児童生徒の割合が、20%近く上昇した。

【図11】



【図11 キャリア実態調査結果(7月・11月)】

また、ポートフォリオに綴じられた活動の記録には、児童生徒の成長を感じさせるコメントが散見される。

校種	コメントの一例（基礎的・汎用的能力）
小学校	<u>より楽しい新聞を書きたい</u> です。（自己理解・自己管理能力）
中学校	<u>僕は役員やリーダーになっていませんが、自分の『役割』として声をだして応援することが『役割』だと思うので…</u> （人間関係形成・社会形成能力）

これらのコメントから「基礎的・汎用的能力」全体の向上がうかがえる。

VII 成果と課題

1 成果

- 「SPDCAサイクルによる指導計画の作成」においては、「C（評価）」「A（改善）」のプロセスから得られたフィードバックを次のサイクルへと活かしていくことが、課題解決学習の質を高めることにつながった。
- 「児童生徒の活動記録のポートフォリオ化」では、児童生徒の活動の記録、工夫・改善点をポートフォリオという形で可視化したことが、よりの確に現状を把握でき、児童生徒の「役割への意識」を高めていくことへとつながった。
- 「課題解決の手立ての工夫」については、目標の要素を細分化・分析するための手立てとして、「5W1H」「SMARTの法則」を活用することで、目標に近づくための明確なプロセスを児童生徒に理解させることができた。

このことから、本年度の研究がめざしてきた「キャリアプランニング能力」の向上、とりわけ、「集団における自己の『役割』を踏まえた児童生徒の育成」という点において、一定の成果を上げることができたと言える。さらに、「キャリアプランニング能力」の向上に主眼を置いたことにより、他の「基礎的・汎用的能力」の向上にもつながった。

2 課題

- 「C（評価）」「A（改善）」の段階においては、振り返りにおける様々な視点の与え方を工夫・改善し、児童生徒の「役割」に対する意識の更なる向上につなげていく必要がある。
- 今後は、特別活動だけにとどまらず、各教科等においてもSPDCAサイクルを取り入れた指導を行い、キャリア教育を充実させる。

以上のことから、さらに「基礎的・汎用的能力」を身に付けさせ、自ら考え、判断し、行動できる児童生徒を育てていきたい。

引用・参考文献

- 「小・中学校キャリア教育の手引き」（文部科学省 平成23年5月）
- 「宮崎県キャリア教育ガイドライン」（宮崎県教育委員会 平成25年1月）
- 「子供たちの『見取り』と教育活動の『点検』」（文部科学省 平成27年3月）
- 「教員研修の手引き 2015 ～効果的な運営のための基礎知識～」(独立行政法人教育研修センター)

研究同人

所 長	江藤 宏			
指導主事	細山田 修			
研究員	大脇 一洋	(宮崎市立赤江小学校)	増岡 三四郎	(宮崎市立宮崎東中学校)
	江藤 彰一	(宮崎市立大塚小学校)	和田 康幸	(宮崎市立大淀中学校)
	池田 亜衣子	(宮崎市立本郷小学校)	外山 敦子	(宮崎市立佐土原中学校)